

ブルース・ウォラーの道徳的責任不可能論と自然的自由意志論

木島 泰三 (Taizo Kijima)

法政大学

「自由意志と道徳的責任」の問題は伝統的に「道徳的責任のために要求されるタイプの自由意志が因果的決定論と両立可能なものとして可能であるかどうか」という問題をめぐり、自由意志と因果的決定論との両立論者たちが道徳的責任を擁護し、非両立論者たち（その中にはいわゆるハード決定論者とリバタリアンが含まれる）が両立論者の主張を退ける、という構図で進んできた。近年では、「楽観的自由意志懐疑主義」を標榜するペレブームやカルーゾーらによる、ハード決定論の立場を拡張した「ハード非両立論」の立場からの、「自由意志なき人生」と「道徳的責任なき道徳」の可能性、さらにそこから導かれる道徳的責任や刑罰制度の廃絶のようなラディカルな実践的帰結を積極的に肯定し、それらを従来の人間観や道徳観に取って代わるより好ましいビジョンとして描き出す、という動向が登場している。

ブルース・N・ウォラーは『道徳的責任廃絶論』（原題は *Against Moral Responsibility*）その他の著作で、ペレブームらの実践的な立場を引き継ぎ、道徳的責任および刑罰制度の廃絶論を打ち出す一方で、彼らの立場の基礎にある自由意志懐疑主義を退け、ある種の両立論的自由意志概念を積極的に提起する、というユニークな立場を支持している。

ウォラーのこのような立場は、自然主義的な世界の中での道徳的責任の可能性を基礎づけようとする従来の両立論者からの支持を得難いものであるだけでなく、道徳的責任廃絶論の主流である自由意志懐疑主義者に属するカルーゾーのような論者からも異議を招いている。実のところ、自由意志懐疑主義者が異議を投じている「自由意志」とは「道徳的責任のために要求される自由意志」であり、ウォラー自身もそのような自由意志概念は退けた上で、伝統的に「両立論的自由意志概念」と呼ばれてきた概念のそれ以外の特徴を保存するのみである。自由意志懐疑論者も「随意性」や「理由応答性」のような、伝統的な両立論的自由意志概念の多くを許容している以上、道徳的責任の否定と廃絶を主張しつつ、「自由意志」という問題含みの概念を肯定するという戦略が、カルーゾーが批判するように、混乱を招きやすい用語上の問題を持ち込むものに過ぎない、という見方も成り立ちうる。

しかしながらウォラーは「自由意志についての、およそ満足はいく説明は、道徳的責任に支えを与えるものでなければならないという仮定が、自由意志に対する私たちの理解を歪めている」という状況認識のもと（『道徳的責任廃絶論』邦訳 p.85）、「道徳的責任とは、道徳的公正に属する概念の一種であって、自由意志とは何の関係もないはずである——とりわけ私たちが求めるものが、自由意志の

適応上の利益を説明してくれるような、自由意志についての自然主義的な説明を求めている場合には、それが言える」(p.88)と述べるように、道徳的責任と自由意志の分離により、一方で道徳的責任廃絶論をより鮮明なものにすると同時に、他方で我々が伝統的に「自由意志」と呼んできた能力のより適切で自然主義的な分析を打ち立てることを提言している。これは高崎将平のいう「責任ファーストの自由論」への異議であり、自由や自由意志の概念のポジティブで多角的な分析を目論むものであって、そこに「自由意志」以外の呼称を割り当てよという要求はこの構想自体の価値を無視するものとも見られよう。

のみならず、報告者はウォーラーのこのような戦略が、伝統的に因果的決定論をベースになされてきた道徳的責任をめぐる議論に潜む問題含みの諸要素を遠ざけ、議論をより適切で経験的な領域に開きうるものであるとも考えている。報告ではこの考察を、デネットによるペレブーム／カルーゾーの「操作論証（操り師論証）」への両立論の立場からの批判等を参照しながら示すことも試みる。

参考文献

デネット、ダニエル／グレッグ・カルーゾー、2022、『自由意志対話——自由・責任・報い』木島泰三訳、青土社。

Pereboom, Derk. 2001. *Living without Free Will*. New York: Cambridge University Press.

Pereboom, Derk and Michael McKenna. 2022. "Manipulation Arguments Against Compatibilism." in Dana Kay Nelkin and Derk Pereboom (eds.), *The Oxford Handbook of Moral Responsibility*, New York: Oxford University Press, 2022, pp.179-200.

ウォーラー、ブルース・N、2025、『道徳的責任廃絶論——責めても何もよくなる』木島泰三訳、平凡社